

トピックス 8月17日(土)北地域交流会に参加しましょう

すでにご案内の北地域交流会は8月17日(土)午後12時30分から墨田区総合体育館武道場【錦糸町駅北口すぐ】で開催されます。ふるってご参加ください。

9月14日(土)江東区教室交流会が初めて開かれます！

江東区にある楊名時太極拳教室12教室が一堂に会して交流する会が以下のとおり初めて催されることとなりました。亀戸スポーツセンター教室、ならびに東大島鶴の会の皆様ふるってご参加ください。

日時； 2013年9月14日(土)10時～12時 (受け付けは9時30分から)

会場； 亀戸文化センター(カメラプラザ) 大研修室

参加費； 無料。ただし1教室1000円程度を教室代表者から徴収(会場費に充当する)

服装； 自由

履物； 床はフローリングです。裸足または上履きで。

東京都支部研修会に参加

さる6月30日(土)に台東リバーサイドスポーツセンターで開催された東京都支部研修会に参加しました。これは東京都支部による研修計画の本年度前期行事として企画されたもので、支部各教室の担当者(指導者、あるいはこれに準ずる師範)を対象に行われたもので、当日は約150名が参加してたいへん盛況で

した。じつは私も研修担当委員会の一員として計画から実行まで参画しました。目的は「楊名時太極拳の基本動作・指導法などについて検証する」ということで、参加者からあらかじめ提出された、“日ごろ指導上悩んでいること、疑問に思っていることなど”も参考にしながら進めるという従来の研修会とは一味違う会となりました。私の担当教室からは宇留野良子(代議員・研修担当委員)、橋本弘子、藤城弘子



の各師範が参加しました。

研修担当理事のお一人である佐藤佳代子師範の実技指導を中心に、2時間たっぷり汗を流しましたが、とくにユニークであったのは、佐藤師範がご自分の教室ですでに実践している車椅子、椅子に座っての、八段錦、二十四式太極拳のやり方と指導上の注意点の開陳でした。(これは私の教室でもすぐ取り入れることが出来ると実感しました。)研修会の様子の一端を写真でご紹介します。【左；椅子に座っての八段錦の実演と体験。右；全員での二十四式演舞】



日本列島を猛暑が襲っています。なにか年毎に暑くなっている感じがです。ちなみに7月12日の東京の最高気温は35度でしたが、(館林はなんと39.5度だったそうです。) インターネットの“世界の天気”を検索してこの日の熱帯の国々の最高気温を調べてみました。

広州(中国) 35度 シンガポール 31度、バンコック 33度、ホーチミン 34度、ニューデリー 31度、
ジェッダ(サウジアラビア) 38度、カイロ(エジプト) 35度

驚きました。日本の夏は熱帯国並みの暑さになってしまっているのです。(もっともシンガポールやバンコックには雨マークが出ていましたので、晴天であればさらに3~4度は高いとは思いますが。)

先日も炎昼の街中を日陰から日蔭へと選びながら歩いている自分に気が付きました。はてなと思いだしたのが、1997年から99年にかけて滞在していたベトナムのホーチミンでの同様な記憶です。東京のこの暑さはまさにホーチミンと同じ暑さなのだと思ったらさらに暑くなってきました。

ただ、東京とホーチミンの違うところは、ホーチミンでは毎日午後から夕方にかけて必ずとっていいぐらい激しい夕立があることです。猛烈な雨で、しばしば雷も伴います。しかし1時間ほどでさーっと上がってしまいます。埃っぽかった並木も道路もすっかり洗われてきれいになり、冷気とともに南国の花の香りがどこからともなく流れてきます。蠱惑的なホーチミンの夜の幕開けといったところですが、その話は別として、ホーチミン、あるいは南国ベトナムの魅力は語れば長い話となりますので、当時作った短歌のいくつかで、その一端をご紹介します。

英字紙に倦みて見上ぐる峯雲を信濃の夏の雲として見る *
巨大なる積乱雲の崩れきてにわか冥きサイゴン埠頭
自転車に鳥籠五つ六つ乗せ木陰に止めて客待つ小鳥や *
濃紺の揃いのアオザイひるがえし三人乗りが駆け抜ける朝 *
雨ならばなお嬉々として球を蹴る炎暑の国の子供らの知恵
ヘミングウェイの映画あるらし校門にアオザイの娘ら集う夕暮れ *
月影は波にくずれてしろがねのサイゴン川はゆるく蛇行す *
ゆるゆると翁ゆきけり水郷の竹橋ゆれて夕暮れる秋
キムヨンジャの「暗夜航路」など聞くままに独り寝る夜の習いとなりしも *

(注; *印の歌は朝日新聞の「朝日歌壇」入選作)

短歌をご紹介します終わろうかとも思ったのですが、懐かしいベトナムの、ベトナムらしい風情を一つご紹介します。これは私が前に書いた『ベトナムアラカルト』からの引用です。

優雅な風物詩 “菅笠” 【『ベトナムアラカルト』 その6 (1998. 11) より】

この国ならではの風物詩といえば、やはり「アオザイ」に並んで「菅笠(ノン)」ということになるのだろうか。都会でも農村でも菅笠姿の女性はごく日常的に見受けることができる。

「菅笠」はヤシの葉、それも若い葉を乾燥して延ばしたものを編んで作るらしいが、象牙色につやつやと輝いて、いかにも軽そうで、機能的に見える。昔は男性もかぶっていたのだが今では女性専科になっている。人文学者の梅棹忠夫氏が「東南アジア紀行」(1964年刊行)という本のなかで、“ベトナムでは誰もがアオザイと菅笠なので、前に回らないと男か女か区別がつかない”と書いているそうであるが、確かに、一昔前までは、男も菅笠をかぶり、アオザイ(長い上着の意)を着ていたのは事実である。ホーチミン市内でも菅笠姿は多いが、さすがに事務所勤めの若い女性にはいない。だいたい彼女らはバイク通勤なので、バイクのスピードと雰囲気には菅笠はそぐわないのであろう。不思議なもので、自転車には菅笠がぴったりあうのである。それに、天秤棒を担いで歩く物売りのオバサン、路上で野菜を売る老婆、シクロ(自

転車タクシー)で行く法衣姿の尼さんなどの菅笠もじつにサマになっている。

やはり熱帯地方ならでの多機能グッズなのである。第一には、もちろん「帽子」としての機能、日除け、雨除けは当然だが、さらには、汗ばんだ顔に風を送る扇子の代わり、小川や井戸端で水を汲むバケツやコップの代わりという機能もある。(注；びっしり編んであるので水が漏れない。)尾籠な話だが、やむなく路上で用



を足さざるを得ないときに、おしりを隠すという特殊用例もあるようだ。幸か不幸かまだその場面に遭遇したことはない。ただし、菅笠を用いずしてご婦人が道端で用を足している姿は数度ならず見受けたことはある。(余談だが、市内には公衆トイレの類は極端に少ない。観光都市を標榜する市当局が最近やっと何ヶ所か新設したところである。)

話を戻すと、娘たちにとっては、“顔を隠す”あるいは“ちょっと見せる”という機能もある。また、内側に小さな鏡を貼っ

て手鏡替わりにしたり、さりげなく男性の品定めをするのに使ったりとか、気に入った愛の詩歌などを書き鏤めたりと言った超優雅な使い方もあるそうである。

こうしてみるとやはり、「菅笠」は「アオザイ」とともに女性専科が良いようである。

【写真；上はホイアン近郊の水郷 下はサイゴン市内 いずれも小生の撮ったもの】

左顧右盼 (74) 【第15話 楊名時師家の名語録をひもとく】

第4話 十年一昔

(1984年5月 「太極」第26号)

今回は草創期のころの思い出を語られた「十年一昔」をご紹介します。

『「医療体術である八段錦、太極拳を通じ、健康の増進と長寿を図り、合わせて八段錦・太極拳の普及。向上と会員相互の親睦を目的」として、「楊名時八段錦・太極拳友好会」を発足させたのが、1975年1月であった。今年1984年は、設立してから10周年にあたる。……私が初めて日本で太極拳を紹介したのは、1960年、アジアアフリカ語学院の中国語を学ぶ学生が相手だった。その後、日本武道館で太極拳を指導し始めたのは、1967年のことだった。毎週木曜日と金曜日の夜が稽古で、最初の五年間は一日も休まずに通った。

1974年、新設の朝日カルチャーセンターで指導するようになったが、これは太極拳の普及にとっても、自分自身にとっても大きな転機であった。……

10年と一口にいうが、10年は、一日の積み重ねである。一週間の、一か月の貴重な積み重ねが10年になったのである。この10年間のうち、年に4回に分けて3か月を一区切りとすると、10年間で40回を数えることとなる。

新宿の朝日カルチャーセンターでいえば、水曜日の午前10時からの教室でスタートし、今でも当初か

らの人々が継続しているが、毎回40人の定員が満員で、なかなかやめる人がない。これは太極拳の持っているよさ、人を引き付けるよさに加えて、立地条件や設備、朝日新聞側の理解ある態度、水準の高さも大いにプラスになっていることであろう。

また、指導者に成長してこられ、ますます増加しつつある仲間の努力と、それぞれの方が持つておられる人間的な魅力と、さらにそれぞれの実力の総合したものが培ってきたものである。

これは各教室にも言えることで、私がいつも誇りに思っているところである。楊名時の力には限りがあるが、太極拳のご縁で、素晴らしい仲間が集まってこられた。これも、太極拳が本来持っている力ともいえるもので、決して偶然ではない。

より多くの人の健康のためにと願ってきたが、これは、すべての宗教を越えた、人間本来の真理にかなっている。……私は、「太極拳は、芸術と武術を合わせ持った健康法です。」と申し上げたい。ゆっくりと深い呼吸をし、宇宙の大自然と小宇宙である自分とを結びつけることによって、より生きる生命力をそこから生み出すのである。しあわせのいとぐちも……。

友好会結成10周年の今年、4月15日に伊勢神宮で、太極拳の仲間130名と奉納演舞をすることが出来た。桜も満開で天の恵みがあり、日本の聖地で、仲間の和と、天地人がそろい、最高の体調で気が満ち満ちた記念すべき演舞を行った。夢と風の向きが一つになって初めてできる、大行事を成し遂げることが出来た。「大地回春」の思いであった。

これからまた初心にかえて心新たに一から努力を重ねよう。』

まさに先生の決意と熱い思いが読み取れる一文です。なお、このときからさらに10年経った1994年10月には同じく伊勢神宮で、全国からなんと3000人の仲間が集まって奉納演舞が行われました。私も故豊島なつ江先生に率いられて参加した懐かしい思い出があります。

旅をうたい拳を詠む

小諸・軽井沢雑詠

梅雨の明けた7月7日、8日に小諸と軽井沢を遊んできました。そのおりの短歌をご紹介します。

藤村の詩碑に真近き東屋に

草笛吹く人それを聴く人 (懐古園)

松風が山麓わたりゆく今朝の浅間の山はぬくと立ちあふる琥珀色の富貴ワインを酌みあえば緑陰涼しき浅間牧場



県境にまたがり建てばこの神社
名前も二つ賽銭箱も
(碓氷峠；写真上)
旧軽のきらびやかなるストリート
縁なきものと
ただ行き過ぎるなり

【写真左；浅間山】